（様式1）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

武庫小学校長　松田　文貴

学校教育目標	未来を生き抜く力と健やかな「からだ」の育成　認め合い　学び合い　高め合い
推進主体	管理職と学力向上担当を中心に　学力向上推進委員会を設置

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等	学力向上に向けての重点的な目標	4月 成果となる目標（指標となる数値等）	4月 具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	2～3月 年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	◆問題を読み取って題意を把握し、自分の考えを書いたり、理由を述べたりすることに課題がある。	○読解力や自分の考えを構築する力を身につけさせるとともに、書字に対する苦手意識を軽減させる。	○各学年に応じ、指定した規定量の作文を書けるようにする。	○朝読書の時間を効果的に活用し、読書習慣を身につけさせる。 ○俳句の交流など、成果物に対して理由をつけて意見を述べる場面を多く設定する。 ○書字が苦手な児童にICT機器で学習を進めさせ、学ぶ楽しさを身につけさせる。 ○低学年から筋道を立てて説明する指導を行い、小グループの交流など自分の考えを伝える場を多く設ける。	○週に2日朝読書に取り組んだり、学習の隙間時間や給食の待ち時間に読書をしたりすることで、内容の読み取りができるようになってきた。 ○川柳に取り組むことで、17音の中に言葉を選んで自分の思いを込めることができるようになった。 ○放送など人の前で話すときの話し方に課題がある。	△
		算数 数学	◆計算問題を解けていないことに起因した文章題の無回答が目立つ。 ◆九九を完全習得できていない児童が高学年でもクラスに数名在籍している。	○練習問題などくりかえし行うことで、基礎的基本的な学力の定着を図る。	○学年末に行う三田市計算検定において、全員が合格できる力をつけさせる。	○のびのびタイムを効果的に運用するために、ミライシードのドリルパークを積極的に活用していく。 ○九九の完全習得に向けてひょうごがんばりタイムを2～3年生でおこなう。	○今年度はのびのびタイムで積極的にミライシードのドリルパークに取り組めた。年度初めは前年度の学年に取り組み、次第に進路に合わせた学習内容に変えていった。くりかえし取り組むことができるので、iPadを持ち帰った際の課題としても活用できた。計算ドリルとの併用で来年度も取り組んでいく。 ○小中連携で本中学校校区における課題として、九九の習得が上がっている。来年度もひょうごがんばりタイムを活用するなど、九九の完全習得を目指して取り組んでいく。	○
		ICT機器を効果的に活用した取組状況	◆ICT機器の使い方について、昨年度は授業研究や研修を行った。体育などの教科で有効に使う方法について分かってきた。 ◆アプリを効果的に活用することでプレゼンテーションを楽しんで行えるようになってきた。	○自分の考えをノートに表したり、ICT機器を使用してプレゼンテーションを行ったりして、順序立てて相手に分かりやすいように説明できる児童を育成する。	○児童アンケートの「いろいろな考えを出し合っていますか」で肯定的な意見を増加させる。 ○毎学期児童によるICT機器を用いた発表をさせる。	○ノートやホワイトボード、またはそれに代わるアプリを用いて自分の考えを交流させ、これらを意図的に授業に取り入れる。	○体育において、ふり返りをオクリンクで提出させたり記録した試合動画をもとに次の作戦を考えさせたりした。 ○音楽ではオクリンクを活用して動画の配信や、楽譜の配布などを行っている。 ○特別活動においては動画の作成やプレゼン発表など効果的に使用できた。 ○子どもたちが使う頻度が高くなってきているので、情報モラルや著作権に関する授業を適切なタイミングで行うことで、情報リテラシーを身につけさせていく。	○
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		◆記述問題に対して無回答のままの児童が各クラスに数名いる。	○各教科の理解を促すために、学習習慣を身につけさせる。	○すべてのクラスで学習開始の合図を同様に行い、授業に前向きに取り組めるようにする。	○ユニバーサルデザインの視点で授業を構築し、すべての児童が学習に前向きに取り組めるよう研修を行う。 ○「家庭学流の手引」を配布し、使い方を指導する。	○授業開始、終了の合図を学校内で統一することで、児童が授業の始まりをしっかり意識できるようになってきている。 ○「家庭学習の手引き」については年度初めに配布した後、点検や検証がなされていないため、どれだけ浸透しているかが分からない。手引きに沿った学習課題を出し、年度途中に確認する必要がある。また、学習習慣の定着度合いにも大きな差があるため、放課後学習等で補っていく必要がある。	△
	授業等からうかがえる状況（各教科）		◆姿勢を保持して一単位時間を過ごすことができない児童が各クラスに数名いる。 ◆自分の意見を表現できる児童とそうでない児童の差が大きい。	○すべての教育活動の中に「からだ」づくりを位置づけ、主体的に学習に取り組む姿勢を身につけさせる。	○学校評価の主体的に学習に取り組む項目の評価においてできていないと答える児童を5％以内にする。	○キッピー体操、リズム縄跳びなどに継続的に取り組ませ学習習慣を身につけやすいからだを育成する。	○毎朝、キッピ―体操や読書タイムに取り組むことで、始業時に落ち着いた気持ちで学習に取り組めるようになってきた。 ○すべての教育活動に「からだ」づくりを位置づけるには、いたっていないが、週1回のリズム縄跳び、隔日のキッピ―体操は定着してきている。	○
学習習慣・生活習慣等の状況	学力向上に係る	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況	◆ゲームやタブレットの使用時間が極端に多く、毎日決まった時間に就寝していないなど生活習慣が身についていない児童が多い。 ◆自尊感情が低く自分の良いところを認められなかったり、先生から認めてもらっていないと感じている児童が多く、困っている人を助けるなど自分の周りにある状況まで考えが至っていない。	○自尊感情を高める取り組みとネットモラルを含めた情報リテラシーの向上を図る取り組みを促進する。	○ゲームやタブレットの使用時間を減少させ、早めの就寝により生活習慣を身につけさせる。 ○自尊感情に関わる項目の向上。	○道徳、生活指導、外部講師の招聘をバランスよく行い、ネットモラルを身につけさせる。 ○学級会や児童集会など特別活動を中心とした児童が活躍する場を設定する。	○「ネットモラルについて」の外部講師やSCによる「心の教室」を行い自分の生活を振り返り、今後どうしていくべきかを考えられるようになってきた。 ○児童会行事を企画し、全校生をリードする仕事を担うことで、最高学年としての自覚を持つことができた。また児童会のたて割り活動（むこっ子活動）の活動では、下級生に対する思いやりが身に付いてきた。今後も充実した特別活動を通して、自尊感情を高めさせたい。	△
		学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	◆自分には良いところがないと答えている児童が28％いる。 ◆児童も保護者も読書習慣が身についていると感じている割合が低い。	○読書習慣の定着を図る。	○児童アンケートの「家で本を読むのが好きですか」で肯定的な意見を増加させる。 ○学校図書館を活用し、当たり前のように身近に本がある状態を作る。	○家庭読書、朝読書の取り組みの継続。 ○お昼の放送などを利用した、図書委員会の活動の充実。	○月1回の家庭読書は今後も継続し、意欲付けを図る。 ○図書委員会の活動やボランティアさんの活動を活発に行ったので、図書室に足を運ぶ児童が多くなった。 ○担任の先生方も児童と一緒に読書をする時間を楽しめるようにしていく。	○
研修の状況	校内研究・	校内研究の状況	◆体育科を中心に「からだ」づくりに関する取り組みを始めた。授業改善だけでなく、すべての教育活動の中で身体教育を行っていく。	○自ら考え、共に高まり合える子どもを目指して研究を進めていく。	○単元を通した学習計画や授業のめあてを立て、見通しを持ち、それに沿って学習を進めることができるようにする。	○単元計画やめあてを見える化し、見通しを子どもたちと共有する。 ○一人一授業公開を位置づけ、お互いに学び合える環境を構築する。	○授業公開、実践交流会を経て、目指すべき児童を育てる授業づくりを考え、体育科においては、授業の流れや教師が抑えるべき要点を、職員間で共有できた。 ○「共に学び合う児童」の育成に向けての話し合い活動や、「感じる・わかる・できるための手立て」については来年度以降も引き続き検討していく。	○
		校内研修の状況	◆児童の生活背景や学力調査の結果をもとに、課題に対して個に応じた指導ができるように職員で共通理解する場を持つ。	○児童の成長や課題、目指す児童像についての共通理解と個に応じた支援の充実を図る。	○児童理解に関わる校内研修会や授業実践の交流会を定期的に開催する。	○定期的な研修会の開催とともに必要に応じてケース会議を持ち、児童理解や支援方法、支援体制を検討する。	○年3回の全体研修会、各学年での1人1公開授業、全職員の実践記録の交流会など、充実できた。また、夏季研修として体育科の実技を伴う研修を1度実施したが、任意の研修として来年度はさらに増やしていきたい。	○
家庭・地域等との連携		家庭・地域等の状況	◆児童の生活背景を十分に把握したうえで児童理解に努めるとともに、家庭学習や適切な生活習慣などを身に付けられるように保護者との連携を大切にしていく。	○家庭における学習習慣を確立する。	○保護者アンケートの「家庭学習」の項目で肯定的な回答が90％以上となるようにする。	○「家庭学習の手引き」を配布し、継続的に声掛けすることで活用させていく。	○家庭学習の手引きを配布するので各家庭意識はしているが、温度差がある。継続的に声を掛けていく。また、学校だよりや学年だより、学級懇談会での話題にも取り上げていく。 ○むこっこ広場など、放課後地域のボランティアさんが週一回学習を支援してくださっているのでクラスでも声を掛けていく。	○
		小・中における教科連携等の状況	◆オープンスクールの参観、中学校の教師による出前授業（理科・外国語）が実施されている。また、生活指導担当教員での小中共同研修や特別支援学級の交流会が開催されている。	○小・中の連携を行い、スムーズな校種間の接続を図る。	○年間2回、中学校の教師を招いて出前授業を行う。	○3学期に中学校の授業を体験し、中学校への不安感を減少させる。 ○学校園所連携連絡会を定期的に開催し、学校間の連絡を密にする。	○中学校からの出前授業で安心感を持たせることができた。	○